

【暗証聖句】

「そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。』」マタイによる福音書/25 章 34 節

【日・イエスの生涯と宣教】

ある安息日、イエス様は生まれ故郷のナザレに来られ、いつものとおり会堂に入って、聖書を朗読しようとして立ちあがられたときのことでした。イザヤ書 61 章節のみ言葉が目にとまり、そこを朗読されました。

ルカ 4 章 18、19 節 「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

イエス様が引用されたこのイザヤ 61 章 1、2 節のみ言葉は、次のように書かれています。

「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み捕らわれ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために。主が恵みをお与えになる年、わたしたちの神が報復される日を告知して、嘆いている人々を慰め」

このイザヤ書の預言は、まさにイエス様ご自身についての預言でした。「主がわたしに油を注ぐ」とは、父なる神様が、イエス様をメシア・キリストとされたということ。つまり、イエス様はイザヤ書 61 章のみ言葉を引用することで、ご自分が預言された救い主であることを宣言されたわけです。「会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた」(ルカ 4:20)と書かれてありますが、彼らはイエス様のことをどのように見つめていたのでしょうか。単に聖書朗読をされたのを聞いていただけだったのでしょうか。それとも、イザヤ書 61 章を朗読するイエス様を見て、イエス様こそ、この預言されたメシアなのだと分かった人はどれほどいたのでしょうか。しかし、多くのユダヤ人にとってメシアとは、圧制者ローマの手から、自分たちを開放してくれるためにやって来られる王でした。しかし、ここに描かれているメシアの姿は、全く異なっていました。メシアなるキリストは、貧しい人に福音を告げ知らせるため来られるのでした。そして、捕らわれている人を解放し、自由を与え、盲人の目を開き、主の恵みが到来したことを宣言するのでした。イエス様が常に貧しい人や弱い人たちに愛を注がれていたお姿の中に、そのことがよく表されていました。バプテスマのヨハネの弟子に、ご自分がメシアであることを示された根拠も、この弱者への愛でした。長い間、虐げられてきた人たちは、このような優しいイエス様に接し、喜び躍ったのでした。

【月・貧しい者への神の備え】

主は、申命記 15 章 11 節で、「この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい」と言っておられます。罪の世においては、貧富の格差が無くなることはありません。しかし、そのことを通して主の愛と栄光は表されることになるのです。「生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい」と主は言われました。その具体的な方法についても記されています。たとえば、レビ記 23 章 22 節では、「畑から穀物を刈り取る時は、その畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。貧しい人や寄留者のために残しておきなさい」と命じられています。何と、細やかな配慮でしょう。貧しい人たちに直接麦の穂を恵んであげるのではなく、彼らも収穫という労働に与かりながら、食べ物を得るようにされたのです。また、詩編 82 編 3 節では、「弱者や孤児のために裁きを行い、苦しむ人、乏しい人の正しさを認めよ。弱い人、貧しい人を救い、神に逆らう者の手から助け出せ」と、食料の援助だけでなく、正しい裁きを行い、神に逆らう者の手から助け出すようにとも命じられています。

このように社会的弱者に寄り添うように生きるとき、神様の祝福が伴うのです。箴言 28 章 27 節では、「貧しい人に与える人は欠乏することがない」と約束されており、箴言 29 章 14 節では、「弱い人にも忠実な裁きをする王。その王座はとこしえに堅く立つ」と書かれてあります。さらに、詩篇 41:2 では、次のような約束さえあります。

「いかに幸いなことでしょう。弱いものに思いやりのある人は。災いのふりかかるとき、主はその人を逃れさせてくださいます」。このように神様は弱い人々を助けることを常に最優先とするようにと教えられており、それに伴う様々な祝福も約束されているのです。教会の働きにおいても、常にこのことを念頭に置くことが大切です。

【火・金持ちの若い議員】

若い金持ちの議員が、イエス様にもとを訪れたエピソードについて、4 福音書のすべてが記録しています。それは永遠の命にかかわる、とても重要な教えがその中に含まれていたからです。この富める青年は、イエス様のもとに来て、「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」(マタイ 19 章 16 節)と尋ねます。この問い自体に問題があるのですが、イエ

ス様はあえてこの問いに対して、次のように答えられるのです。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」(マタイ 19:21)。イエス様は最初に、この青年に、「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである」と、人間が永遠の命に値するような善き者などにはなれないのだぞと語りつつも、青年の問いに合わせるように、「じゃあ、もし命を得たいのなら、掟を守りなさい」と、十戒の戒めを示されます。それに対して青年は、「それらは皆守ってきました」と答えるのです。イエス様は、「そうか、では行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施し、戒めを守っていることを具体的に示しなさい。そうすれば、完全なものとなる。天に富を積むことになる」と言われたのでした。すると、この青年は、「それを聞いて、悲しみながら立ち去った」(マタイ 19 章 22 節)のであります。それはたくさんの財産を持っていたからだと理由が書かれてあります。資産家ではなくても、すべてをささげて主に従うということは簡単なことではないでしょう。イエス様は、善行を積むことで永遠の命を得ようと思っても、できるものではないということを示されたのです。このとき永遠の命と天秤にかけられたのは、いみじくもお金でした。「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」(マタイ 6:24)とイエス様は言われましたが、本当にその通りなのです。

ではどうしたら良いのでしょうか。「いったい誰が救われるのだろうか」と不安がる弟子たちに、イエス様は、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と言われたのでした(マタイ 19 章 26 節)。ここが大切なのです。だから、貧しい人を助けてあげる行為についても、そうしなければならないと思いつめるのではなく、もし難しいと感じたなら、イエス様がそうさせてくださるのだと信じて、すべてを主に委ねていくことが大切です。

### 【水・ザアカイ】

富める青年が、貧しい人に財産を施すことができずに、悲しそうに去っていったことに反して、自ら貧しい人に財産を施しますと宣言した人物が聖書の中で出てきます。有名なザアカイです。ザアカイも裕福な人でした。しかし、ザアカイはイエス様に、「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」(ルカ 19:8)と自ら言ったのでした。すると、イエス様はザアカイに、「今日、救いがこの家を訪れた」(ルカ 19:9)と言われたのでした。ところで、ザアカイはイエス様が富める青年に示されたように、「全財産を施して、主に従います」とは言っていません。ザアカイが宣言したのは、財産の半分でした。それなのに、「今日、救いがこの家を訪れた」と言われたのはどうしてでしょうか。問題はすべてか半分かということではなく、お金の執着から解放されて、神様を第一としているかどうかなのです。富ではなく、主なる神様を主人としているかどうかなのです。富める青年には、厳しいようでも、すべてをささげよと、主にのみ従う決心をせよと促す必要があったのです。そうしないと、富が彼を滅ぼしてしまうことになるからでした。また、ザアカイの救いについては、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と言われたイエス様の言葉の成就でもありました。もともと、ザアカイはお金に執着しない人だったわけではなく、イエス様がザアカイと呼ばれ、家に泊まって一緒に時をすごすうちに、彼の心の中で何かに変化したのです。その変化の表れが、彼の告白となってできたのです。不思議なことです。しかし、ここに主の救いと人が作り変えられていく奇跡の事実を見るのです。

### 【木・人間ヨブについて考える】

ヨブ記といえば、苦難の意味を教える書であるのと同時に、ヨブがどういう信仰者であったかを示す物語でもあります。ヨブ記 1 章 8 節に、主がサタンに対して、「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」と言います。口語訳では、ヨブは「完全」で「正しい人」であったと訳されています。大きな苦難の後、それは変わりませんでした。神を呪ったり、神から離れたたりすることはなかったのです。

ところで、ヨブ記 29 章 12 節～16 節にかけて、ヨブが苦難にあう前にどのように生きていたかがわかるヨブ自身の言葉があります。そこには、「身寄りのない子らを助けた」「助けを求める貧しい人々を守った」「やもめの心を生き返らせた」「見えない人の目となった」「歩けない人の足となった」「貧しい人々の父となった」「かかわりのない訴訟にも尽力した」など、ヨブが弱者に対していつも心をかけていた人だったことがわかります。彼がどうして主から賞賛を受けたのか、なぜ完全で正しいものと言われたのか、その大きな理由の一つが、弱者のために生きていたからだったのです。エレン・ホワイトは、ヨブは人々の必要を調べ、積極的に行動したと解説しています。まさに、神様を信じる者たちの模範的存在だったのです。

そのようなヨブに試練が突如襲ったので、いったいなぜなのかと、ヨブの悩み苦しみの原因となっていくのですが、それは神がサタンに対して罪の世にあってもなお正しく生きる人がいることを証明するためであったと共に、ヨブをもう一段高い信仰の世界に導くためでもありました。終わりの時代に生きている私たちも同様です。常に訴えるサタンに対して、私たちはそれでもなお愛に生き、信仰を守り抜くことで、主の栄光を表すのです。